

琉球大学学術リポジトリ

[症例報告]胃癌胃全摘7年後に合併した吻合部食道癌の1例

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学医学部 公開日: 2010-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): metachronous double cancers, adenocarcinoma of the stomach, squamous cell carcinoma of the esophagus 作成者: 野原, 正史, 正, 義之, 武藤, 良弘, 外間, 章, 山里, 将仁, 上原, 力也, 玉城, 哲, 戸田, 隆義, Nohara, Masafumi, Sho, Yoshiyuki, Muto, Yoshihiro, Hokama, Akira, Yamasato, Masahito, Uehara, Rikiya, Toda, Takayoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015802

胃癌胃全摘7年後に合併した吻合部食道癌の1例

野原 正史 正義之 武藤 良弘 外間 章
山里 将仁 上原 力也 玉城 哲¹⁾ 戸田 隆義²⁾

¹⁾琉球大学医学部第一外科

²⁾琉球大学医学部検査部病理

はじめに

癌に対する診断技術の発達と治療の進歩により癌患者の寿命が延長し高齢化社会が到来した結果、第1癌の治療後第2、第3の癌の発生する頻度が年々増加し、第2、第3の癌の早期発見、治療が重要視されるようになった。今回われわれは胃癌にて胃全摘をうけてから7年後に合併した吻合部食道癌の症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患 者：58歳，男性

主 訴：食思不振，乞逆，腹部膨満感

既往歴：昭和54年11月，他院で噴門部胃癌（Borrmann 2型，Stage III）の診断にて胃全摘術（p-loop，Roux-Y 吻合）を施行された。その時の癌組織型は中分化管状線癌であった（Fig. 1）。その後，免疫化学療法としてOK-432（3KE，1回/週）を2年間投与されていた。

家族歴：特記すべき事なし。

現病歴：昭和61年5月下旬頃より食思不振，乞逆や腹部膨満感が出現し，徐々に悪化して来たため他院を受診した。その時，上部消化管造影と内視鏡検査により吻合部胃癌再発と診断されて，昭和61年7月14日当科に紹介され入院した。

入院時現症：身長162cm，体重44.0kg。栄養不良であったが，黄疸や貧血はなく，表在リンパ節も触知しなかった。胸部は理学的に異常を認めず，腹部平坦で，前回の手術創痕を認める。他は腹部に特に異常は認めていない。

入院時一般検査：CBCで，Hgb 11.0 g/dl，

Hct 35.2%と軽度の貧血がみられたが，その他は正常で，tumor marker（ α -Fetoprotein 0.1 ng/ml，CEA 0.7 ng/ml，CA 19-9，17.9 ng/ml）も正常範囲内であった。

上部消化管造影検査：入院時の上部消化管X線造影検査で，食道空腸吻合部に全周性の狭窄がみられた（Fig. 2-Left）。

内視鏡検査：門歯より40cmの部位の食道空腸吻合部に一致して狭窄があり，狭窄部より肛門側には内視鏡を挿入できなかったが，狭窄部より口側の右側壁を中心にピランと肥厚を認めた。（Fig. 2-Right）。その時の生検では，小胞巣を形成する非角化扁平上皮癌と診断された（Fig. 4-Top）。

手術所見：腫瘍は腹部大動脈に沿って腸間膜根部より食道裂孔に浸潤波及し，周囲の横隔膜にも浸潤して同孔を完全に閉鎖していた。そこで横隔膜及び周辺臓器と腫瘍を一塊にして切除した。再建術式は胸空内で食道空腸端側吻合をおこなった。

肉眼所見：腫瘍は吻合部食道側に存在し，食道は全周性に肥厚して吻合部空腸や横隔膜への浸潤がみられた（Fig. 3）。

組織所見：癌は生検時の組織所見と同一で，中分化型扁平上皮癌であって，食道壁全層に浸潤がみられた（Fig. 4-Bottom）。

術後経過：術後，放射線療法（48.6 Gray）を行ない，症状の改善が見られ，全身状態良好となり11月20日退院した。

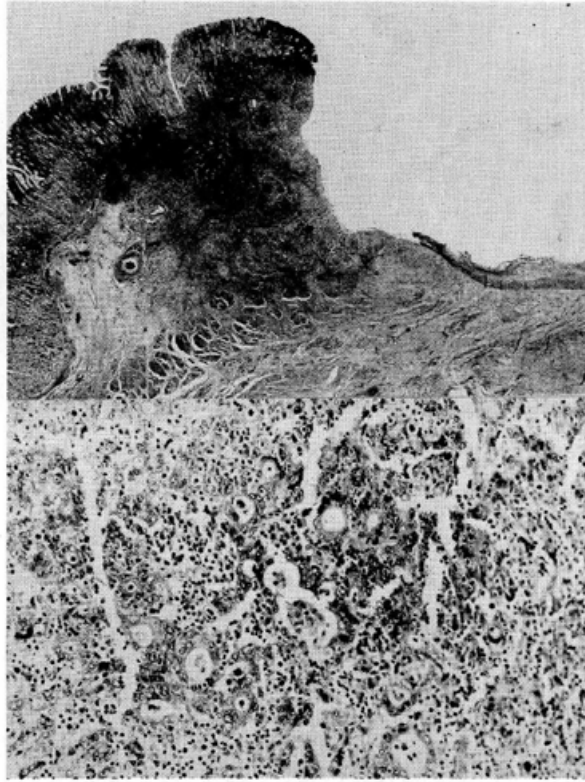


Fig. 1 Microphotographs of carcinoma of the stomach showing the cross section of the wall of ulcerating carcinoma (Top) (HE, $\times 5$) and histology of carcinoma (Bottom) (HE, $\times 25$).

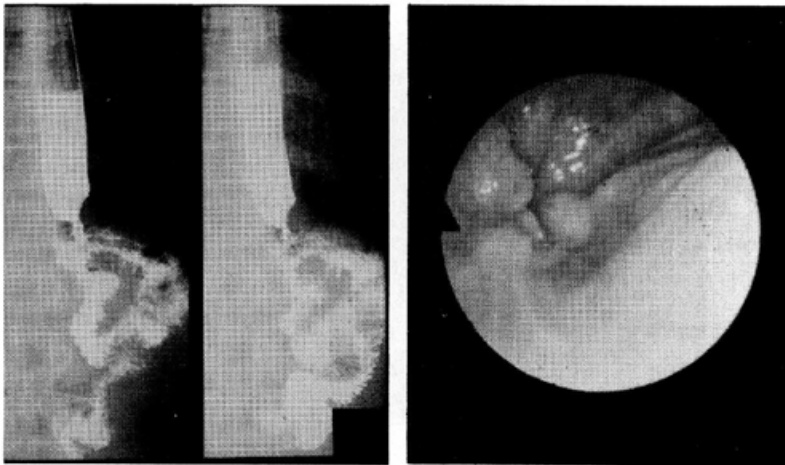


Fig. 2 Upper GI series demonstrating a stricture of the esophagus at esophagojejunostomy (Left) and endoscopy showing a complete stricture of the esophagus (Right).

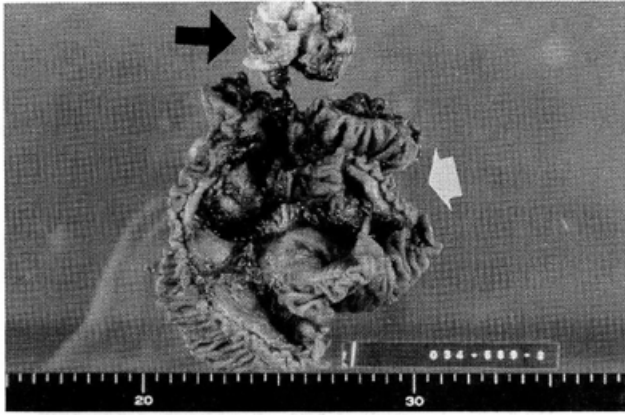


Fig. 3 Macrophotograph of the resected specimen showing the involved esophagus (black arrow) and looped jejunum (white arrow).

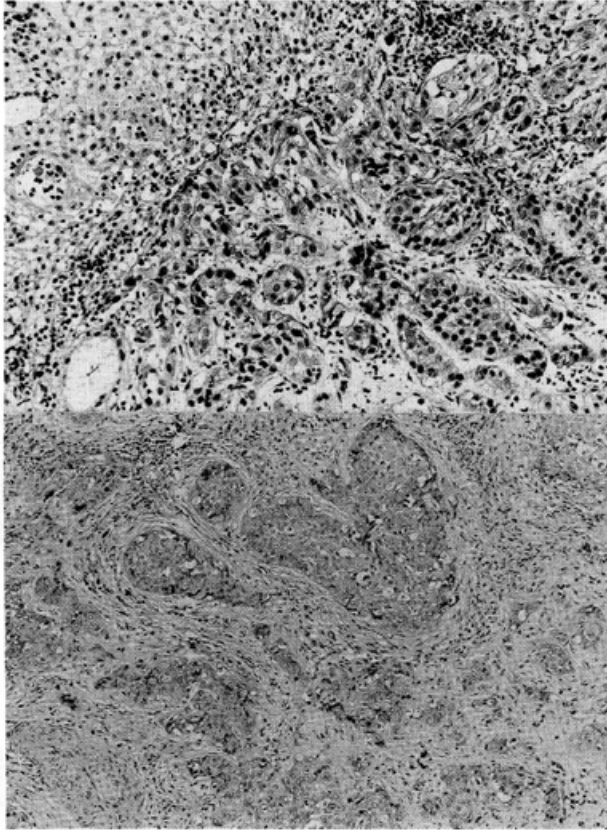


Fig. 4 Microphotographs of carcinoma of the esophagus showing non-keratinizing squamous cell carcinoma of the biopsied specimen (Top; HE, $\times 50$) and of the resected specimen (Bottom; HE, $\times 25$).

考 察

Warren & Gates¹⁾は、重複癌の定義として①各腫瘍は明らかな悪性像を呈する。②互いに離れた部位を占める。③一方が他方の転移でない、の3つの条件を満たす事が必要と提案し、この定義が一般的に支持されている。この定義に従うと、われわれの症例は胃と食道の異時性重複癌と言う事ができる。胃癌と重複する食道癌の頻度についてみると、第37回胃癌研究会の報告²⁾では、食道癌10.1%と、大腸癌、子宮癌について多く、日本病理剖検輯報での集計³⁾によると、食道癌12.8%と肺癌について多い。これら両者の報告からも胃癌に重複する癌として食道癌の頻度が比較的高頻度であることがわかる。

重複癌合併胃癌の手術時の年齢は、梨本ら⁴⁾は、60歳代が38.8%、高木ら⁵⁾は、50歳代と60歳代が33%と最も多く、須田ら⁶⁾も同様に60歳代に最も多いとしている。このように、胃癌の重複癌症例の重複癌診断時の年齢は、多くの報告で60歳代に多いと述べられている。われわれの症例もほぼ類似した年齢であった。これに対して、単発胃癌の初回の手術時の平均年齢は梨本ら⁴⁾は、男性57歳、女性54歳、吉野ら⁷⁾は、56.9±0.5歳と述べており、この両者の年齢を比較すると重複癌合併胃癌の重複癌手術時の年齢の方がやや高齢であるということが出来る。

癌の家族歴に関しては、重複癌の発生した家族に有意差をもって癌発生頻度が高いとする報告⁴⁾⁷⁾と、有意差がないとする報告⁶⁾とがあり、まだはっきりした結論には達していない。本症例では癌の家族歴はない。

重複癌の発生までの時間的間隔について梨本ら⁴⁾は、重複胃癌例の第1癌診断から第2癌診断までの間隔を平均7年7カ月と報告している。これらの症例のうち、5年以上たってから発生した頻度は約59%となり、片山ら⁸⁾の成績の68%とほぼ同程度となっている。

われわれの症例は胃癌術後7年に食道癌が発見されたが、これは報告にみられる重複癌の多くの症例の時間的発生間隔と一致している。

一般に重複癌症例の予後は第2癌の予後に依

存すると考えられている。このことは、第1癌が早期に発見治療され、長期生存した例に第2癌が発生すること、いいかえると、今迄は第1癌によって死亡していた患者が診断及び治療の進歩により長期生存した結果、第2癌の発生が起り得たということの意味する。重複癌症例では第1癌に、術後長期生存する早期癌が多いのは当然としても、第1癌が進行期癌であったわれわれの症例は、むしろまれな症例といえる。

今回、われわれが経験した症例は胃癌手術より7年後に診断された異時性進行食道癌であった。この両者発生の因果関係を検討すると、胃癌による胃全摘術後、長期にわたる小腸内容の逆流性刺激によつての食道癌の発生も考えられるが、癌の発生より進行期癌に至るまでの癌の時間学⁹⁾よりみると、7年前の胃癌手術を行った時点で、すでに微小食道癌が存在していたのではないかと考えた方が妥当と思われる。この症例より得られる事は、第一癌である胃癌の手術時には他臓器の癌、特に胃癌に比較的多く重複する食道癌の有無の精査を行なうことや、胃癌術後の Follow up を定期的に行い第2癌の早期発見に努めるべきであるという事である。

ま と め

胃癌に対する胃全摘術後7年目に食道空腸吻合部に認められた胃食道異時性重複癌の一手術例を報告し、文献的に考察を加えた。

参 考 文 献

- 1) Warren, S. & Gates, O.: Multiple primary malignant tumor. A survey of the literature and a statistical study, Am J Cancer 16, 1358-1414, 1932.
- 2) 第37回胃癌研究会(世話人 阿部令彦): 胃と他臓器の同時性および異時性重複癌—アンケート調査のまとめ—, 日癌治, 17(4), 1226-1233, 1982.
- 3) 日本病理学会編: 日本病理剖検輯報第9-23輯 日本病理剖検輯刊行会, 東京, 1967-

- 1981.
- 4) 梨本 篤, 田中乙雄, 大浜秀夫, 吉川時弘, 高橋修一, 佐々木公一, 川口正樹, 曾我淳, 武藤輝一, 渡辺英伸: 胃と他臓器との重複癌, 癌の臨床, 28(7), 809-815, 1982.
 - 5) 高木國夫, 渡辺進, 高橋知之, 太田博俊, 霞富士雄, 大橋一郎, 西満正, 梶谷銀, 加藤洋: 胃癌と他臓器癌, 最新医学, 40(8), 1634-1641, 1985.
 - 6) 須田雍夫, 渡辺秀裕, 真船健一, 伊津野脩, 武内 脩, 関根 毅, 藤田吉四郎: 胃癌を中心とした重複癌, 埼玉医会誌, 20(2), 363-368, 1985.
 - 7) 吉野肇一, 浅沼史樹, 花谷勇治, 熊井浩一郎, 石引久彌: 胃と他臓器の重複癌, 癌の臨床, 30(12), 1514-1523, 1984.
 - 8) 片山憲侍, 高浜龍彦, 山村卓也, 金丸仁, 田中洋一, 丸山雄二, 和田達雄: 胃癌と他臓器重複癌, 癌の臨床, 28(5), 426-433, 1982.
 - 9) 草間悟(編): 臨床腫瘍学, 南江堂, 129-156, 1982.

CARCINOMA OF THE ESOPHAGUS OCCURRED 7 YEARS AFTER TOTAL GASTRECTOMY FOR GASTRIC CARCINOMA: REPORT OF A CASE

Masafumi Nohara, Yoshiyuki Sho, Yoshihiro Muto, Akira Hokama
Masahito Yamasato, Rikiya Uehara and Takayoshi Toda*

The First Department of Surgery, School of Medicine, University of the Ryukyus
and Clinical Laboratory*, Ryukyu University Hospital

A case of metachronous double cancers (stomach and esophagus) in a 58-year-old man is reported herein.

The patient was admitted to the University Hospital on July 14, 1986, with a diagnosis of recurrent carcinoma of the stomach. His past history revealed that he had total gastrectomy for carcinoma of the stomach (Borrmann 2 type, moderately-differentiated adenocarcinoma, stage III) 7 years prior to this admission.

On admission, he appeared ill with a complaint of swallowing disturbance. Upper GI series demonstrated a stricture of the esophagus at esophagojejunostomy. Endoscopic examination also showed a complete stricture of the distal esophagus. The biopsied specimen revealed non-keratinizing squamous cell carcinoma. At surgery, the esophagojejunostomy site was markedly involved by carcinoma, spreading onto the diaphragm and down to the paraaortic region. The involved portion of the esophagus and jejunum with the surrounding tissues was resected. He was treated with irradiation after surgery. He is doing well 6 months after surgery.

Key words : metachronous double cancers, adenocarcinoma of the stomach, squamous cell carcinoma of the esophagus